第１回「文化の泉を掘る～三島町歴史文化基本構想について～」（8/8 開催）

モニター参加者レポート

第１回「文化の泉を掘る～三島町歴史文化基本構想について」に参加して

岩波友紀

今回の「連続オープンディスカッション　奥会津の周り方」は、奥会津は自然に根差した文化を育んできたこと、首都圏へのエネルギー供給を支えてきた歴史があることを背景に、近年や今現在は奥会津の町村がそれぞれ何を大事にし、そこにどのような個性または共通点があるのかを見つめていくというものです。5 回にわたって行われるうちの１回目の三島町でのお話を聞きました。

私がこのオープンディスカッションに興味を持ったのは、特定の狙いがありました。私は現在写真家をしていますが、20 年ほど前、三島町で豪雪の中行われたサイノカミに出会い、見たことのない文化に衝撃を受けました。また三島町にはサイノカミだけでなく伝統的な行事がいくつも現存していることを知り、戦後に写真家・濱谷浩が「雪国」で発表した世界がまだここに残っているのかと思い、そこから奥会津に興味を持ちました。何年かかけてその奥深い文化を撮影したいと思いましたが、いろいろな理由で頓挫し、昨年改めて取材撮影しようと会津に転居しました。

しかしながら奥会津のことを知るにつれて、ただ単に伝統の文化が残っているという現代のユートピア的なことだけではないことがわかってきました。山に閉ざされた奥会津でも効率化、グローバル化の影響は十分に浸透し、自然を相手にした文化、さらに生活までも、意図的に守らなければ存続しない状態であること。また、水力発電という経済的恩恵を受けて存続していたこと、などです。

今回の三島町でのディスカッションでは、まさに足下にある文化を大切に受け継ぐことが町の宝になるという構想のもと、保存、継承に努力されてきた経緯をお聞きできました。町の活性化に躍起になる場合、何か新しいことを始めることが多く行われたり、それでも今では地域の文化を「売り」にする試みは全国的にありますが、50 年も前から三島町では地域の文化に目をつけ守り続けてきたことを知り、その先見の明に驚きでした。さらに町民が意識せずに民俗文化を大切にしていることは、その歴史の長さゆえの結果であり素晴らしいことだと感じました。こういった地域の民俗文化は、意識するものでなく生活の一部であったものです。同じように継承され続けていても、どれだけ「保存しよう、やらなきゃ」と意識することなく自然に行われるかというのが根本的に意味のあることだと改めて感じました。その「意識しない感」は三島町ではどの程度なのかを、深く知りたかったです。

根本の変革がない限りどうしても経済性が必ずつきまとうので、経済と（全くもって経済性と縁のなさそうな）文化を結び付けて存続させなければいけないことはとても大変なことと思います。

私的な感想になってしまいますが、ただ単に残っているわけではない生活と文化の現状を知ることで、奥会津への関わり方、作品を作っていく上での大きな指標の一つとなり、今後

のディスカッションにも期待しています。個人的には只見川電源開発による生活、文化への影響、両者の関わりなどをもっとお聞きできれば幸いです。まだ１回目なので、今後の町村とどうつながっていくか楽しみです。

今回の複数町村にわたるディスカッションは、町村の垣根を越えて他町村の動きを知り、さらには今後連携したりすることにもなりそうな、とても素晴らしいアイデアで有意義なことだと感じました。しかしながらこういったイベントの常ではありますが、いつも同じメンバーばかり集まり、なかなかその外へ広がらないことが往々にしてあると思っています。もっと一般の町民村民、会津以外の人や私のような他分野の人などが集まれる、関われるような広がりがあればと感じています。